

## 本テキストの活用にあたって

### 1. 学習を進めるにあたって

本テキストは、第1講から第15講まで、15の講義により構成され、「初等科教育法（音楽）」について学ぶようになっています。本テキストを使って学習する際、次のことに留意して、学習活動を行ってください。

- ①本テキストとe-Learningは、事前にテキストと動画で学習する自律的なオンライン研修の教材です。
- ②講習の内容は、まず、テキストとe-Learningとの両方を活用して学びます。
- ③講義では、始めに各講で講義の目的と学習到達目標についての説明を行います。
- ④講義内容について、受講者による自己研修を行います。
- ⑤各講の終わりに課題を示します。自分の学習の深度に従って、考えてみましょう。

### 2. 本テキストによる講義の特色

- ①学習が進めやすいようにするテキストと、講義内容を解説する動画の視聴を併用することで、受講者の学びを確実にするとともに、受講者の便宜を図っています。
- ②多忙な学習者にとって、いつでも、誰とでも、どこからでも受講者の都合で講義内容についての基礎的な学習が進められます。
- ③講義の内容は、「初等科教育法（音楽）」について短時間で学習できるようにするものです。一度の講義による講習とちがって、テキストとe-Learning等の教材は、繰り返し視聴することができます。
- ④講義の内容は、受講者にとって、その後の職場での教育実践に有効に活用していただける内容です。また、テキストと動画を、職場の校内研修や研究会などで活用していただくことで、受講者が学んだことを多くの学習者に広めることが可能になります。

### 3. 本テキスト及びe-Learningの利用にあたって

- ①本テキスト及びe-Learningの著作権は、岐阜女子大学にあります。
- ②著作権や肖像権など取扱いには注意してください。

### 4. QRコードの利用にあたって

QRコードは、タブレットPCやスマートフォンのQRコードリーダーをご利用ください。



クリエイティブ・コモンズ



クリエイティブ・コモンズ

**【学習到達目標】**

- ・ 21 世紀に求められる学力について説明できる。
- ・ 資質・能力を引き出す授業の条件を説明できる。

**1. 知識基盤社会で求められる力**

21 世紀にふさわしい主体的・協働的な授業をいかに設計し、評価していくべきだろうか。21 世紀の知識基盤社会における「確かな学力」は「他者と協働しつつ創造的に生きていく」資質・能力の育成であるため、授業では、他者と共に新たな知識を生み出す活動を引き出しつつ深い知識を創造させていく経験を、数多く積ませることが重要である。ここでは、21 世紀に求められる学力を育む新たな授業と評価について、背景や実践事例を紹介しながら考える。

知識基盤社会では、すべての人が対話しながら新たな知識を生み出していくことが大事だとされている。現在、ICT の進展の結果、様々な情報で世の中は溢れている。これら情報を賢く取舍選択し活用していくためには、情報を比較・俯瞰・統合して自分にとって活用可能な知識に加工していくような「情報を統合して必要な知識を生み出す」ことが一人一人に求められている。これは、専門家がまとめた情報を知って利用すればそれほど間違いがなかった時代とは異なり、知識を得るスキルよりも知識を創り出すスキルが重要になっていることを示している。加えてこの現代社会は、様々な問題を抱えている。「知のギャップ問題 (Ingenuity Gap)」と言われているが、多文化共生、テロリズム、資源問題、地球温暖化、治療薬のない病気など、人類が知識を生みだした故に抱えてしまった解の見えない問題に対して、知恵を出し合い少しずつでも解決していくような、一人一人が知識を生み出し貢献していく社会が期待されている。

2009 年に発足した国際団体 ATC21S (21 世紀型スキルの評価と教育プロジェクト)が提出した 21 世紀型スキル白書の中では、各国の教育政策やカリキュラムを検討して、4 領域からなる 10 個のスキルを 21 世紀型スキルとして示している(表 1-1)。総体として整理すると、「ある目標を解決するために、他者と共に様々なテクノロジーも活用しながら知識を生み出し、またそのプロセスを通じて新たな目標を発見するような知識を生み出し続けるスキル」と言える。

表 1-1 21 世紀型スキル (ATC21S より)

思考の方法	1. 創造性とイノベーション
	2. 批判的思考、問題解決、意思決定
	3. 学び方の学習、メタ認知
働く方法	4. コミュニケーション
	5. コラボレーション (チームワーク)
働くためのツール	6. 情報リテラシー
	7. ICT リテラシー
世界の中で生きる	8. 地域とグローバルのよい市民であること (シチズンシップ)
	9. 人生とキャリア発達
	10. 個人の責任と社会的責任 (異文化理解と異文化適応能力を含む)

## 2. 21 世紀型学力を育成する授業への変革

このような「資質・能力」にフォーカスした教育改革は国内でも議論されている。例えば、2013 年 3 月の国立教育政策研究所の『社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則』の報告書では、「未来を創る (実践力)」「深く考える (思考力)」「道具や身体を使う (基礎力)」の三層からなる「21 世紀型能力」として整理、提案している。そして 2014 年 11 月の中教審への諮問では、学習指導要領改訂に向けて育成すべき資質・能力をふまえた教育課程の構造化を求めた。そこでは、新しい時代に必要となる資質・能力として「自立した人間として、他者と協働しながら創造的に生きていくために必要な資質・能力」「我が国の子供たちにとって今後重要と考えられる、何事にも主体的に取り組もうとする意欲や、多様性を尊重する態度、他者と協働するためのリーダーシップやチームワーク、コミュニケーションの能力、豊かな感性や優しさ、思いやり等」と記している。また、育成すべき資質・能力を育むためには、いかに学ばせるかが重要で、課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び、いわゆる「アクティブ・ラーニング」がキーワードとなっている。

## 3. 授業・教育課程のすがた

益川弘如氏 (聖心女子大学) は、平成 27 年度文部科学省委託事業「総合的な教師力向上のための調査研究事業」において本学が平成 27 年 12 月に作成した「教材開発の基礎としてのインストラクショナルデザイン」の中で、次のように述べている。

学習科学の研究領域では、「知識は社会的に構成されるもの」という考え方を基盤



社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則(報告書)

として「世の中の学びをよりよいものへと変容させる」ことに研究の焦点をあて、現場の先生と共に研究している。学習科学が確かな学力や資質・能力を育成する授業で強調するのは「知識創造モデル」である。そこでは子供たち自身からさらなる追究が生まれるよう学習活動をデザインし、他者との協調活動を通して知識創造させていく「前向きアプローチ」の授業設計が基本となる。資質・能力を発揮させながら存分に知識創造活動を行わせるため、ツールや文脈を活用して支援していく。これは現在主流の「後戻りアプローチ」によって、学習目標を教師が固定的に規定し、その枠内で基礎基本や思考の仕方や話し合い方といった「型」をまず学ばせ、その後応用問題を流暢に解けるようにさせる、一律のステップを踏ませて知識や学び方を空の容れ物に入れていく「知識習得モデル」とは異なる。

表 1-2 は、教育課程の軸と教育方法の軸で分類した 4 つの知識観（A～D）を示している。知識創造モデル・前向きアプローチで重視しているのは、資質・能力を生かし高めながら深い内容理解を目指す「D」型である。子供たちはこれまでの学習で培った資質・能力をもちあわせている。授業展開の中で、その子供の実態に合わせた課題・教材を与え、資質・能力をさらに発揮させ高めたい。

しかし、現在の多くの学校現場では、最初に基礎基本と言って、教科内容である知識を詰め込み、伝え合いと言ってプレゼン発表などのスキル訓練を行う「A+C」の組み合わせが多く見受けられる。学習者中心の授業方法が重要だと認識していても、最初に「C」の資質・能力育成で、聞き方・話し方、思考の方法といった型のスキル訓練を行ってから、「B」の問題解決型授業に入る。これでは、問題解決活動は子供の態度に依存することになり、「(わかり) 有能に学ぶ子供とつまらなさそうに付き合う (見ているだけの) 子供」にわかれてしまう。

表 1-2 教育課程と教育方法の軸で整理した知識観

	教師中心授業	学習者中心授業
教科の内容を中心に	A：知識の詰め込み	B：深い内容理解
資質・能力を中心に	C：スキルの訓練	D：スキルを引き出し深い内容理解

これらの状況を踏まえると、21 世紀に求められる学力を育むためには、授業改革が、従来の教育課程の一部に「D」型の授業を取り入れる「付加型モデル」ではなく、年間指導計画における「A」「B」「C」型の授業スタイル（時数）をできる限り減らし、「D」型の、授業主体で教育課程が設計される「変容型モデル」が望ましい。

このようなカリキュラム・マネジメントの発想で、子供たちの学びが「知識創造」の育成につながるよう、学校全体の教育課程で 21 世紀型学力を育成したい。

## 4. 評価のすがた

「知識習得モデル」を脱却し「知識創造モデル」に移行するためには、学習成果である評価の考え方も変えていく必要がある。いわゆる「テスト」で達成度を測る「後向き」の教育と評価から、子供が何を知っていて、何ができて、それが対話の中でどのように変化しながら、理解を深めていっているか、また、進捗に応じてゴールを再設定したり、ゴールに到達しても、さらに、時間をかけて追究したりしたいような疑問や問いが出てきて、知識の適用範囲がどんどん広がっていくような、連続的なものとして次の学びにつなげていくサイクルを回す「前向き」の教育とその評価を目指そうとしている。

「D」型授業である「前向きアプローチ」では、子供の変容が重視される。具体的には、評価の主体を、形成的評価のような「変容的評価」を軸に据える必要がある。学習の過程においては、学習計画表や振り返りワークシート等に、考えを記述させたり発表させたりするなどして、一人一人の知識創造の変容を追うことで、子供の資質・能力の高まりや、次の授業計画のヒントを得ることができる。スキルと知識は、一体的に扱うことで、教師は、「知識創造」の場面そのものを捉え、子供が取り組みたい課題に対して、活動を通して資質・能力を発揮し深い理解を達成できたか、また新たな疑問や追究が生まれたかなどを評価し、子供の学習成果を再評価する。評価したいのは、その時点での子供の「考え」や「理解」であり、その変化である。これら学習記録のデータを得ることによって、一人一人の状況を把握した支援を検討し、授業改善のヒントとすることができる。これこそが、未来の学びにつなげる評価となっていく。

## 5. 「前向き授業」をつくる音楽科の取り組み

資質・能力を発揮させる授業は、発達段階から、小学校低学年には難しいのではないかと、という考えがうかぶかもしれない。そうであっても、子供の「できること」や「今はできないが、工夫すれば引き出せること」がたくさんあることは、先生方が一番ご存じのところであろう。子供の可能性の限界を押し広げられるような授業が構想できれば、適切な支援のもとで、活動目的を共有し、主体性をもってデータを集め、まとめて理論化する「前向き授業」をつくることができる。

ここで、1人1台タブレット端末を用いて、子供の資質・能力を発揮して理解を深めていく、「D」型の「前向き授業」を検討してみよう。小学校2年生（鑑賞）で、主教材「くまばちはとぶ」の、楽器の特徴及び演奏の魅力をとらえる活動を通して、曲や演奏のよさを見い出す授業を構想してみる。

「くまばちはとぶ」は、まるはなばちが飛ぶ時の大きなはね音や、飛ぶ動作を楽曲に表現した「描写音楽」である。学習課題は「はちがとんでいるようすにあう楽

器を見つけよう」と設定した。あらかじめ教師が児童の1人1台タブレット端末に、楽器演奏の動画、「フルート（木管楽器）、トロンボーン（金管楽器）、マリンバ（打楽器）」を準備・提示した。

表 1-3 授業デザインの比較

知識習得型授業案 「B+A」型	知識創造型授業案 「D」型
1. クイズ：この曲が表している虫は何でしょう 「くまばちはとぶ」オーケストラ演奏鑑賞	1. クイズ：この曲が表している虫は何でしょう 「くまばちはとぶ」オーケストラ演奏鑑賞
2. スライドに楽器（木管楽器、金管楽器、打楽器）を提示し、はちのようす「熊蜂の飛び方（NHK for School）」を表していると思う楽器を聴き比べて選ぶ	2. タブレットに準備されている楽器（木管楽器、金管楽器、打楽器）の演奏コンテンツを聴き比べ、はちのようす「熊蜂の飛び方（NHK for School）」を表していると思う楽器を選ぶ
3. 合うと思う楽器毎に児童がその特徴を発表し、選んだ理由を音色の特徴を教師が結びつけてまとめ、（児童が）異なった演奏形態による表情の違いを感じ取る	3. 違う楽器を選んだ児童に、その楽器はどんなはちの様子を表しているか質問した後、再度演奏動画を鑑賞して、異なった演奏形態による表情の違いを感じ取る
4. 楽器の音あてテストをして、楽器の音を聴き分けることができるかどうかを確かめ、オーケストラ演奏で、曲の雰囲気や表情を楽しむ	4. 楽器によって異なる音色の特徴の違いについて考えをもってオーケストラ演奏を鑑賞し、曲の雰囲気や楽器によって異なる表情の違いを楽しむ

表 1-3 の表右側、「D」型の学習活動の流れ 2 では、自分のペースで 3 つの楽器の演奏を、自分のタブレットで鑑賞し、はちのようすにあう楽器を、動画で鑑賞して、何度か試し比べて選ぶことができる。学習活動 3 では、自分が選んだ楽器以外の楽器を選んだ児童に、質問に行く活動を設定した。なぜその楽器が合うと思ったのかその理由や、曲がどんなはちの動きを表現しようとしているのかなど、友達の想像を聞く対話をしくむ。子供は、対話することで、友達の考えと比較したり、自分の考えを再度吟味したりして、再度曲を聴きなおす中で、はちの動きと音楽の特徴を結び付け、演奏形態が異なると曲の表情が違うことをつかむ。子供によっては、このほかの楽器に、もっとはちの羽の音に近い楽器があるのではないかと発展的に考えたり、自分はくまばちは怖いと思っていたけれど、友達はかわいいくまばちを考えていたから、選んだ楽器が違っていたので、もう一度聴いてみてかわいいくまばちをさがしてみようかな、と再考したりして、楽器による曲の表情の違いを楽しむ力を伸ばしていくことができる。

このように、楽器の知識を習得してから曲の楽しさを見い出す知識習得型授業案「B+A」型に対し、知識創造型授業案「D」型は、楽器によって異なる演奏の楽しさを見い出す資質・能力を引き出す過程で、楽器についての新たな知識を見出し、他者と考えを比較することで吟味したくなる文脈を設定した。

知識習得型では、楽器の音色についての知識習得が目標であるため、児童が選んだ楽器毎の感受を教師が比較して、理想的な解をまとめてしまう。教師が的確に楽



社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原理(報告書)

器の音色の特徴を聴き取っている児童の意見に対して、「この説明はいいね」と価値付けたり、挙手によって音楽の得意な生徒の意見を教室全体に伝えたりするような「A」の活動が組み込まれ、他の児童は、楽器の音色の特徴を受動的に聞くだけである。

知識創造型授業案では、児童自らが別の楽器を選んだ児童の意見を聞きに行き、その対話をもとに、楽器毎の音色の違いを見直す比較鑑賞の活動を取り入れた。この変更によって、「B+A」の、教師が比較し、児童が答えを受動的に聞く知識習得活動から、「D」の児童同士で対話した後に比較鑑賞し答えを創り出す、資質・能力を発揮しながら答えを生み出す知識創造活動に学習活動をシフトさせたのである。

#### 【参考文献】

- 1) P・グリフィン「21世紀型スキル」北大路書房
- 2) 国立教育政策研究所編「社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則」
- 3) 岐阜女子大学編：教材開発の基礎としてのインストラクショナルデザイン
- 4) 白井 俊「OECD Education 2030 プロジェクトが描く教育の未来」ミネルヴァ書房
- 5) 国立教育政策研究所紀要第146集  
白水 始：評価の刷新 ―「前向き授業」の実現に向けて―

## 課題

1. 知識習得モデルと知識創造モデルの違いを説明しなさい。
2. 知識習得モデルから知識創造モデルへの授業改善について、具体例をあげて説明しなさい。
3. 変容的評価について、具体例をあげて説明しなさい。